

## 2 「7世紀の変化」をめぐる研究史

### 《7世紀前後の地中海世界》

#### ◎7世紀：イスラムの勃興

☆スラヴ人の南下・定住：バルカン半島や中東欧に広く定住

⇒地中海周辺地域の政治的・文化的秩序が大きく変容する時代

◎ビザンツ（東ローマ）帝国：シリア・エジプトなどを失って、小アジアとバルカン半島の一部を主要領域とする国家へ

◎イタリア：ローマ教皇も独自の政治的実力を持つようになっていく

◎フランク王国：メロヴィング朝の権力・権威が失われ、代わって宮宰などの大貴族が大きな勢力を持つようになる

### 《ビザンツ帝国の「出現」？》

◎ビザンツ帝国：7世紀に「成立した」とする見解が根強く唱えられる

☆G・オストロゴルスキー：7世紀に「テマ制」が導入されるなど、ビザンツ帝國的な国家制度がこの時期に整備されていくと主張

☆井上浩一：7世紀から1204年までをビザンツ帝国の時代とする

⇒6世紀以前の地中海世界をどのように評価するのか、という問題ともかかわる

◎6世紀までの地中海世界：かつてはローマ帝国の「衰亡」期として捉えられる...3世紀以降、ローマ帝国や古典的な文化が次第に衰退・消滅していく時代

☆4世紀以降のローマ帝国：「専制君主制」の時代と見なされる...皇帝が超越的・強制的な権威・権力を持つ国家と見なされる

→こうした議論に対する反論：部分的には20世紀前半から

●H・ピレンヌ：アラブの進出によって地中海世界に大きな断絶が起きたと主張

◎強制国家論に対する本格的な反論：20世紀後半から

☆A・ジョーンズ：3世紀末から7世紀初頭までを後期ローマ帝国の時期とし、社会もそれまで思われていたほどカースト的な社会ではなかったことを主張

☆P・ブラウン：3世紀から7～8世紀までの時期を「古代末期(Late Antiquity)」という独自の文化的意義を持った時代として定義

⇒7世紀（初頭）までを独自の時期として理解：7世紀に「ビザンツ帝国」が出現したという見解と整合性が高い

### 《近年の研究動向》

◎20世紀末以降：ブラウン的な「古代末期」理解に対する疑問が出されるようになっていく

☆発掘の進展：特に西ヨーロッパ地域で、ブラウンの支持者らが主張するようなゲルマン人がローマ世界に順応し、統合していったといった見解に強い疑義

●B・ワード＝パーキンス、P・ヘザー：（西方の）ローマ帝国はゲルマン人の侵入によって破壊され、古典的な文化も崩壊したと主張

☆文書の分析：古代末期の農村経営に対する分析の進展

☆7世紀とそれ以前の連続性を示す見解が強く主張されるようになっていく

⇒7世紀が地中海世界にとって大きな画期の一つだったことは否定できないにせよ、それまでの時代と大きく様相を異にする、全面的な変化の時代だったとは考えにくいのでは？

☆ブラウンらの研究をも受容しつつ、10世紀頃までの連続性を意識する研究も

◎少なくとも、6世紀の状況を踏まえつつ、7世紀の状況について分析を行う必要

### 3 6世紀初頭の地中海世界

#### 《後期ローマ帝国》

◎3世紀末以降のローマ帝国：「後期ローマ帝国」の時代

①政治運営・決定において中央政府が関与する度合いが高くなる

☆元首政期：中央政府は地方（属州）における政治運営・決定には直接的に関与することが少ない...各属州内の都市が周辺領域を支配し、自立的な政治運営が続く

●中央政府：基本的には税収が確保され、軍事的・政治的な脅威にならないことを重視

●地方出身者が元老院議員身分や騎士身分に参入していく傾向

☆4世紀以降：徴税や行政などで属州都市が占める役割が制限される...主要都市には中央政府から統治官が派遣される

●属州の細分化：各属州の総督は以前以上に属州内の各業務に関与するように

☆土地に関する中央政府の把握の努力の強化

☆法律によって人々の身分を縛ろうとする

②軍事と行政の機能的分離：軍事的キャリアのみで社会的上昇をはかることも可能に

☆元首政期：4世紀後半以降は高位の軍団司令官が元老院議員に任命される

☆近衛長官(Praefectus Praetorio)のように文武の双方の権力を持つ官職が消滅

●Praefectus Praetorio：コンスタンティヌス大帝期に軍事権限を失って純粋な行政官職に

☆野戦軍の設置：従来からの軍に代わって、帝国の主要な精鋭軍を攻勢

●各地域ごとに設置：首都近郊に中央軍(Praesentalis)も置かれる

●従来の軍：各地方の防衛軍(Limitanei)として存続

### ③首都に比較的充実した中央行政機構

☆一部権限が重複するなど、若干冗長な行政機関が設置される

☆皇帝に私的に奉仕する部局が元首政期と比べて肥大化：皇帝直轄領も各地に設けられる

☆首都：3 世紀後半～4 世紀末まで皇帝の座所は比較的頻繁に移動

→ 4 世紀末以降東方ではコンスタンティノーブル、西方では 5 世紀初頭以降ラヴェンナが  
宮廷・中央政府の所在地としてほぼ定着

### 《帝国を取りまく世界》

#### ◎西方（西ローマ帝国）：政治的実態としては 460 年代までにほぼ消滅

☆ヴァンダル王国の成立：国家システムの維持に東帝国の援助が不可欠に

☆ゲルマン諸国家（ヴァンダル王国以外）：東帝国の皇帝から名目的な官職や位階を与えられ、ローマ帝国の法律や制度を維持

●元老院議員：西帝国各地に残存し、政治的支配層・大土地所有者としてなお存続

⇒少なくとも 6 世紀後半まではローマ的な社会制度が根強く存続

#### ◎バルカン半島：フン人やゲルマン人が 5 世紀前半までこの地域を混乱させる... ドナウ中流域では 5 世紀中盤までに（政治・軍事勢力としての）ローマの影響力が後退

☆バルカン半島北中部：少なくともドナウ川沿岸部や主要街道沿い、沿岸部などではローマのプレゼンスが残る

☆ギリシア地域：なおアテナイなどの主要な都市が存続

#### ◎東方：ササン朝ペルシアとの緊張関係が続く

☆ 4 世紀末以降比較的安定した状況

●アルメニア：387 年に分割...591 年までこの状況が続く

⇒ 6 世紀前半までペルシアとの関係は安定

☆コーカサス方面から遊牧民が小アジアに侵入する事例

## 4 都市の変化

### 《古代都市》

#### ◎古代の都市(πολις, civitas)：単なる「人のたくさん居住しているところ」ではない

☆「(その都市に) 所属している」というアイデンティティを共有する人間集団の共同体

☆人口の集中する居住区のみが「都市」なのではない：都市周辺の村落部なども都市領域(χώρα, territorium)を持ち、支配する

◎都市の運営：民会などの集会も開催されるが、元首政期には有力者による寡頭支配...都市運営を通常的に処理する都市参事会(βουλή, curia)を支配

☆都市内の公共施設の建設や維持運営なども行う

### 《後期帝政期の変化》

◎後期帝政期：それまで都市に相当委ねられていた地方行政の責任や実務に中央政府がイニシアティヴをとるように

☆属州の細分化：都市行政は、属州総督の下僚となるデフェンソル(Defensor)などが任命されて行う

●デフェンソル：都市参事会員以外の人間を任命することも可能

●徴税：アナスタシウス 1 世（在位 491-518 年）時代には官僚(Vindex)によって行われる

☆周辺領域の分離：都市（&都市参事会員身分）は主要な財源を喪失

●都市参事会員には都市の運営や維持に関する責任が課され続ける

●公共施設の維持・運営が不十分になっていく：キリスト教の浸透（教会などの増加）も相まって、都市景観の変化が進展

☆娯楽の中央集権化：後期帝政期には多くの都市で馬車競技が主要な娯楽に... 5 世紀以降、徐々に各地にファンクラブ（デーモス δῆμος）が設置される

●デーモス：赤・青・緑・白の各組に分かれるが、青組と緑組が主要な勢力となる

\* 皇帝や、各地の有力者たちが支援

⇒ 3 世紀まで都市で大きな発言力を持っていた都市参事会員身分が、4 世紀以降急速に没落していく

◎教会：ローマ帝国の行政システムをモデルとするヒエラルヒーを作り上げていく

☆修道院：4 世紀後半になると東方属州を中心に共住修道院が成立・増加

☆地方都市の行政に対する主教の介入：東帝国では比較的限定的

☆非キリスト教的な公共建築の放棄：神殿や劇場などの放棄・転用が進展

◎村落部：都市の支配から離れ、独自の発展を遂げる村落も出現

☆規模が拡大し、地域の経済・交易の拠点と化す地も：法的地位がないため、「都市」ではない／大半は「都市」とはならない

### 《地域的な差異》

◎都市：元首政期以前からその所在地には偏り

☆経済活動による偏り：古代末期には沿岸部など、交易路沿いの都市などが繁栄を続ける

一方、衰退する都市も存在

☆軍事的側面：バルカン半島などでは 5 世紀には都市が衰退・消滅していくプロセスへ

☆政治体制の偏り：西帝国などを中心に、都市参事会が比較的後の時代（6 世紀）まで存続した都市も

## 5 エリートと中央政府

### 《新たなエリート》

◎強力な中央政府の存在：大量の官僚を必要とする

☆行政システムの肥大化：一定の教養が必要とされる

☆軍事と行政との分離：軍指揮官がさらに必要となる

→軍指揮官などにゲルマン出身者などが登用される

⇒行政官職の需要に応じるために、各地から多数の教養ある人物がコンスタンティノーブル（や属州の首府）を目指す

☆都市参事会員身分に対する規制

☆主教などの教会のポストも都市参事会員身分の生き残りの場に

◎行政機構の要職にある人々：4 世紀以降は元老院議員に大量に編入されていく

☆コンスタンティヌス大帝以降の諸皇帝：大量に元老院議員に編入していく

→350 年代には約 300 人だったコンスタンティノーブルの元老院議員の数は、380 年代には約 2000 人に

☆372 年以降は軍の指導層にも門戸が開かれていく

⇒元老院議員身分を持っていることが、国家エリートの地位を示すものとなる

◎元老院議員身分の階層化：従来からあったクラリッシムス(Clarissimus)の称号（位階）に加えて、ウァレンティニアヌス 1 世（在位 364-375 年）期にはその上位の位階(Illustris, Spectabilis)が出現... 6 世紀までにさらに上位(Magnificus, Gloriosus/ Gloriosissimus)が設置される

☆基本的に身分は世襲されない：元老院議員の子にはクラリッシムス位のみが認められる

☆下位の位階は権能が制限されていく：クラリッシムス位には 5 世紀中盤からコンスタンティノーブルにおける議員の義務の一部が許可されなくなる

⇒属州各地に、クラリッシムスやイルストリスといった元老院議員資格を持つ有力者が居住

### 《大土地所有の進展》

◎地方の「元老院議員」：多くは所領を形成・拡大して富裕化していく（全員ではない）

☆ 5 世紀中盤以降、所有した土地を直接経営することで利潤を拡大していく方向性が東方属州などで明確に

→ 中小の自作農をコロヌス化・契約労働者化したり、パトロネジ関係を形成することで自らの支配下・庇護化に入れていく：徴税・納税をも代行

● 西ヨーロッパの同時代の古典荘園制度との近縁性？

☆ 婚姻関係などによる他属州や首都の有力家門とのネットワークの形成

☆ アピオン家（エジプト）：5-7 世紀にエジプトとコンスタンティノーブルの双方で大きな政治的影響力を持った一門... 根拠のオクシリンコス・ノモスを中心に広大な所領を経営

● 所領はコロヌスなどの労働力によって支えられる

● 私兵（ブケラリイ *Bucellarii*）を保持：公的な軍を私的に動員する場合も

⇒ 各地に同様の有力者が出現？

☆ シリア北部の石灰岩台地の住居：規格化された大量の住居が建設される

☆ 小アジア内陸部のようなあまり豊かではない地方にも「元老院議員」が存在

◎ 都市の運営：一部の「元老院議員」＝富裕な大土地所有者や主教らなど、「なかば公的な制度外」の少数者たち (*Possessores, etc.*) による運営へ

☆ ウィンデクスやパガルコス (*Πάγαρχος*) らの主要な地方官職を寡占していく傾向

◎ 有力者たちの政治的影響力：6 世紀には無視できない大きさになる

☆ 中央政府：地方の有力者たちの影響力拡大に警戒しつつも、彼らを利用せざるを得ない

⇒ 6 世紀には多くの地方属州で、大土地所有者＝有力者たちが国家の公的な権力・権威を表象する存在になっていく

## 6 停滞の時代

### 《ユスティニアヌス 1 世》

◎ ユスティニアヌス 1 世（在位 527-565 年）：ユスティヌス 1 世（在位 518-527 年）の甥

☆ ユスティヌス 1 世：アナスタシウス 1 世の宮廷護衛長官 (*Comes excubitorum*) を務める

● マルキアヌス（在位 450-457 年）：テオドシウス 2 世（在位 408-450 年）の姉のプルケリアと結婚

● アナスタシウス 1 世：ゼノ（在位 474-491 年）の妃アリアドネが名目的な「皇帝任命権者」となる

→ ユスティヌス 1 世の即位の正当性を保証する存在が不在の状況下で即位：総主教による戴冠が行われる

◎ユスティニアヌス 1 世の時代：ユスティニアヌス 1 世の「業績」として知られているものの大半が 540 年代前半までに遂行される

☆行政・軍事機構の改革：一部属州で文武のシステムの融合がおこなわれる

●エジプト：一部の属州で総督がドゥクスを兼任(Dux et Augustalis)

●ユスティニアヌス軍管区(Quaestura Exercitus Justinianus)

☆『ローマ法大全（ユスティニアヌス法典）』（529 年）：古代以来のローマ法や解説の集成

☆ヴァンダル王国の征服（533-534 年）

☆「ニカの反乱」（532 年）、聖ソフィア教会の再建（537 年）

☆東ゴート王国の征服（535 年～）

◎コンスルの事実上の廃止（541 年）：これ以降コンスルは皇帝のみが就任するのみとなる

☆コンスル制度の廃止：ユスティニアヌス 1 世治世後半期に明確になっていく、社会のキリスト教指向の一端？

### 《ペルシアとの戦い》

◎ササン朝ペルシア：6 世紀になってエフタルを打倒すると再び西方への進出姿勢を強める  
...フスラヴ 1 世（在位 531-579 年）時代にシリア・コーカサス方面で積極的な攻勢に出る

☆アンティオキア：529 年にラフム朝の軍によって包囲され、540 年にササン朝の軍によって破壊される

☆アルメニア方面軍の設置：東部方面軍の管轄地域の一部を分離させる

⇒ササン朝とのあいだに断続的に休戦協定が結ばれる：ササン朝に貢納金を支払う形で休戦

◎ガッサン朝：アラビア半島北西部を拠点とするキリスト教化したアラブ人の部族

☆ラフム朝やササン朝ペルシアの勢力と対峙：属州アラビアやパレスティナ地域の防衛も実質的に担う...パレスティナ地域におけるローマの防衛体制がアラブ人主体に

◎シリアにおける戦争状態の恒常化：アラビア半島経由の交易が活発に

☆マッカ（メッカ）など、ヒジャーズ地方のアラブ人商人がシリア・パレスティナやエジプトに数多くやって来る

### 《疫病と経済の停滞》

◎540 年代以降：気候の寒冷化が進行...ペストも断続的に流行するようになる

☆地震も各地で頻発

◎人口の減少・税収の減少：治世前半の、大土地所有者との対決路線の破綻

☆戦争や都市の再建、慈善事業などのために支出は増大

☆地方の有力者：中央政府の地方における統制を阻害する一方、彼らを通じて税収の少な

りの部分が確保される...彼らの影響力拡大に警戒しつつも、彼らを利用せざるを得ない

●中小規模の自作農が大都市所有者の支配・庇護下に入る傾向が加速した可能性

⇒6世紀には多くの地方属州で、大土地所有者＝有力者たちが国家の公的な権力・権威を表象する存在になっていく

☆地方の有力者が地域の防衛に一定の責任を負う状況？

☆教会の政治運営への利用：各地の有力者に対抗する方策？

◎都市の衰退：6世紀後半以降、地中海世界各地で広範に進行

☆各地で都市域の縮小が起きる

## 7 文芸・学問とキリスト教

### 《ユスティニアヌス1世とキリスト教》

◎社会のキリスト教化：4世紀の公認・国教化によって一気に進展したわけではない

☆4世紀の皇帝：即位の時点ではまだ「キリスト教徒」ではない人物が多い

☆元老院議員になお多数の非キリスト教徒

⇒東帝国では住民の大半がキリスト教徒となるのは5世紀末頃と思われる

◎非キリスト教徒に対する圧迫：徐々に強まっていく

☆テオフィロス：非キリスト教の神殿を信者ととともに破壊

◎ユスティニアヌス1世：治世初期から、非キリスト教徒に対する圧迫政策を展開

☆学校に対する圧迫：529年にアテネのアカデメイアの（事実上の）閉鎖を命じる

☆ベリュトスにおける法学教育が6世紀中盤頃に終焉を迎える？

⇒6世紀後半以降の文芸活動に影響？

☆東帝国における文芸活動：ギリシア語による歴史記述は7世紀前半の『復活祭年代記 (Chronicon Paschale)』を最後に事実上途絶

☆高等教育が停滞？

◎イコン崇拝：6世紀中盤以降、東帝国各地で急速に拡大

☆マンディリオン：シリア北部のエデッサで「発見」される

### 《パイディアの衰退》

◎古代のエリートたち：ヘレニズム期以降、ギリシア語（あるいはラテン語）を学び、地中海世界である程度共通した教養（パイディア）を身に付けていた

☆初期のキリスト教：新プラトン主義などの古代の哲学の議論の成果を受容

◎キリスト教化の進展：オリエンズ道の諸属州を中心に単性論が大きな支持を得る



☆単性論:451年のカルケドン公会議で公式に否定される...カルケドン信条を認めない諸派と、コンスタンティノーブルの宮廷や教会との対立・亀裂が徐々に大きくなっていく  
→ユスティニアヌス1世期にはアンティオキア・アレクサンドリアの総主教座が分裂

◎東方の諸教会：カルケドン派とは異なる独自のアイデンティティを強めていく

☆エデッサ：シリア北部・メソポタミア北部における単性論派のコミュニティの中心...古代のエデッサ（オスロエネ）王アブガル5世（在位前4-後7, 13-50年）がキリスト教を受容したという伝承を形成・強化していく

●シリア語による記述：皇帝やコンスタンティノーブル、帝国との関係性が徐々に希薄に→皇帝を中心とするキリスト教ローマ理念とは異なる意識

⇒ギリシア語（&ラテン語）を基盤とする、地中海世界全体で共通する教養＝パイディアの持つ意味が低下していく

◎中央：古典的なパイディアの持つ意味が後退する、という点では同様の傾向

◎アルメニア：6世紀後半以降、皇帝や総主教からの干渉を強く受ける...カトリコスを頂点とする独自のアルメニア教会としてのアイデンティティを強めていく

☆アルメニア：カルケドン公会議に代表を送れず

⇒ローマ帝国や周辺世界で共有できる「パイディア」が失われていく：帝国（や地中海世界）の統合を危うくする条件に

### 《国家統合の理念としてのキリスト教》

◎ユスティニアヌス1世期（特に後半）以降、（カルケドン派の）キリスト教が国家の統合理念として大きく前面に出てくる

☆アルメニアなどへのカルケドン派の強要

☆聖母マリア崇拝の拡大：7世紀前半以降、聖母子のイコンが宮殿の門に掲げられる

◎理想の皇帝としてのコンスタンティヌス大帝：6世紀中盤以降強調されるようになる...それまではキリスト教的イメージが強く、強い肯定的イメージを持たれていない

☆「コンスタンティヌス」名を持つ皇帝：ティベリウス2世（在位578-582年）から

●最初から「コンスタンティヌス」名を持つ皇帝：コンスタンティノス3世（ヘラクレイオス・コンスタンティノス、在位641年）

⇒「新しいコンスタンティヌス」としての（キリスト教徒としての）理想的皇帝像の一般化

## 8 「内陸」からの後退

### 《軍事力の限界》

◎東帝国：6世紀になると一転して帝国の多くの方面で軍事的脅威が出現

☆東方：ササン朝の脅威の復活

☆イタリア半島：東ゴート王国との戦争に20年を要する

●ランゴバルド人：ランゴバルド王国、ベネヴェント公国、スポレート公国が成立

⇒数多くの戦線で同時に大規模な軍事行動をおこなうことは困難

《バルカン半島》

◎バルカン半島：他地域に比べると経済的後退が早く進み、都市の衰退も早い

☆エーゲ海沿岸部やドナウ川流域、主要な街道沿いに守備隊が展開、軍事拠点として都市・都市的居住地も存在

●イストロス河畔のニコポリス：元首政期の都市の遺構の上に城塞が建設される

◎ユスティニアヌス1世期：黒海北岸から遊牧民（あるいは混成集団）が進出

☆ドナウ流域：属州を制度的に維持するのが困難になりつつある...ユスティニアヌス軍管区は対応の一つと考えられる

☆アヴァール人：ユスティニアヌス1世時代にドナウ河口付近まで進出

⇒ユスティヌス2世（在位 565-578 年）時代にドナウ川を越え、バルカン半島への本格的な侵入を開始

☆スラヴ人：バルト海沿岸部に居住していたが、古代末期にゲルマン人の故地へ南下

◎ローマ帝国：ユスティヌス2世期以降はササン朝ペルシアとの戦いが再び激化

⇒帝国軍の主力をシリア北部・コーカサス地域に展開させざるを得ない

《北アフリカの状況》

◎北アフリカ：ヴァンダル王国が支配...一時シチリア島やサルディニア島などにも進出

☆ヴァンダル王国：旧ローマ帝国領のうち、カルタゴ周辺の沿岸部を中心とした地域のみを支配...内陸部や西部はベルベル人の首領が分立

☆ベルベル人：ローマ化が進行...王(rex)や皇帝(imperator)を自称する首領も

→旧ローマ領にヴァンダル王国とベルベル人の諸君侯領の双方が成立

⇒ユスティニアヌス1世が再征服したのはヴァンダル王国のみ：ベルベル人との衝突が断続的に続く

◎北アフリカの軍事力：初期段階から現地からのリクルートが想定される

☆ユスティニアヌス1世治世後半：旧ヴァンダル領でも、内陸部では一部の城塞などをのぞいて実効支配が及ばない

◎経済的状況：おそらくビザンツ支配下に経済活動の後退を経験...コンスタンティノーブル

などへの税や穀物の負担が発生する

☆他地域に比べると停滞の程度は小さい？：地中海世界の他地域との交易活動は存続し、大土地所有者も存在

●北アフリカ産の赤色土器(African Red Slip Ware)が地中海各地でなお流通

### 《辺境防衛システムの変化》

◎帝国の辺境：バルカン半島や北アフリカ、イタリア半島などでは沿岸部や一部地域以外に実効支配が及ばなくなる

☆東部国境：シリア北部・メソポタミアに大規模な軍事力を投入して国境を維持...シリア南部では城塞群を建設する一方、防衛はアラブ部族やアラブ人の傭兵などに委ねられる

●ガッサン朝：6世紀末に一時解体させられる

●軍の待遇の悪化：給料未払いなども起き、軍が断続的に反乱や騒擾を起こす

☆軍司令官職などを中心とした要職に、皇帝一門や皇帝の側近が主に任命されるように

⇒6世紀末までに辺境部の支配・防衛体制に大きなほころびが生じる

## 9 皇帝とアルメニア

### 《フォーカス帝》

◎602年：ドナウ流域に駐屯していた軍団が反乱を起こす...コンスタンティノーブルに進撃

☆コンスタンティノーブル：皇帝一門のゲルマノスによる陰謀が進行？

☆コンスタンティノーブルのデーモスが市壁の防衛に動員される：6世紀後半から、コンスタンティノーブル防衛などに軍事力として動員される事例が増える

●デーモス：602年の状況では「民衆」ではなく、皇帝が投入できる首都の軍事力

⇒マウリキオス帝は失脚、ドナウ軍団の中からフォーカス（在位 602-610年）が皇帝に

☆518年以来の、先帝との血縁等のつながりのない人物

☆コンスル職への就任の強調：コンスル職と皇帝位が一体

### 《ペルシアの攻勢》

◎ササン朝ペルシア：591年以来の和約を破棄してビザンツ領へ攻勢をかける

☆フスラヴ2世（在位 590-628年）：マウリキオスの支援を得て帝位につく

◎現存する資料：フォーカス帝治世の早い段階からペルシアがシリア・メソポタミア地域に侵入していたように記述

☆フォーカス帝時代に関するギリシア語の歴史記述：基本的に親マウリキオスか、親ヘラクレイオス（在位 610-641年）の立場で書かれる

● 『テオファネス年代記』：反フォーカスの資料に基づくクロノロジーを構築

◎ヘラクレイオス一門の反乱：マウリキオス帝末期からアフリカ総督（エクサルコス ἑξάρχος）のヘラクレイオス一族が、608 年からフォーカス帝に対して反乱を始める

☆総督：カルタゴとラヴェンナに設置される...辺境部で文武の双方に対して監督権を持つ

☆608 年にエジプトに反乱軍が進出してアレクサンドリア・下エジプトを制圧...シリア北部・メソポタミアでペルシア軍と戦っていた軍をエジプトに動員せざるを得なくなる

⇒609 年以降、シリア・メソポタミア地域でビザンツ軍による抵抗が不可能となり、ペルシア軍が圧倒的優位に

☆610 年秋：総督ヘラクレイオスの息子のヘラクレイオスがコンスタンティノープルを制圧してフォーカス帝を殺し、帝位に就く

☆ヘラクレイオス帝のシリア進出：613 年にアンティオキア近郊で敗北

⇒610 年代末までにペルシアがシリア・エジプトの全域を制圧

☆小アジアへの進出：全体としてカイサレイア～アンキュラ～カルケドンを結ぶ道路沿いが中心で、さほど被害は大きくない

《ヘラクレイオスの反撃》

◎ヘラクレイオスの反撃：624 年以降に本格化...シリア・エジプトの奪回ではなく、ササン朝ペルシアの中枢地帯に直接侵攻する策をとる

⇒イラクに向かう中継点として、コーカサス地域が戦略的に重要な意味を持つ

◎アルメニア：ヘレニズム期から王国、後 62 年からアルサケス家によって王位が世襲される

☆恐らく 314 年に国王ティリダテス 4 世が洗礼を受ける

⇒387 年にペルシアとローマで分割される

☆591 年にペルシア側（ペルソアルメニア）の大半がビザンツ帝国に割譲される

◎624 年：カイサレイアからペルソアルメニアに侵入

☆ササン朝の宗教的中心であったタクト・イ・スライマン神殿を破壊

⇒626 年後半に一旦コンスタンティノープルに帰還？

◎627 年：中央アジアから南下してきていたトルコと同盟してササン朝を攻撃

☆年末にザグロス山脈を越えてニネヴェ周辺の平野部に進出、さらに南下：628 年初めにペルシアでクーデターが起き、4 月から和平交渉

⇒630 年に和平交渉がまとまる：シリア・エジプトが返還される

☆持ち去られていた「真の十字架」がイェルサレムに戻される

◎ヘラクレイオスのプロパガンダ：ローマ帝国の正しさ、勝利を強くアピール

☆タクト・イ・スライマン神殿の破壊：ペルシアの信仰にダメージ

☆「真の十字架」の奪回や聖母マリア信仰などを利用

## 10 アラブの勃興

### 《シリア・エジプトの沈滞》

◎シリア：6世紀後半以降断続的にペルシアとの戦争が続く

☆地方エリートたちが防衛も負担：戦争状態の恒常化に伴ってエリートたちも疲弊

☆一般民衆の国家・有力者たちに対する不満が高まる：アンティオキアなどで民衆が暴動を起し、有力者たちもその標的となる

⇒シリア地域で全般に経済の停滞、社会秩序の不安定化が明確になっていく

◎ササン朝ペルシアの侵入・支配：シリア・エジプト地域の政治・経済構造に大きな影響

☆アピオン家：610年代末以降、史料に言及されなくなる

●630年代以降、アレクサンドリア総主教を通じてエジプトをコントロールしようとする

☆ヘラクレイオスの勝利：直接シリア・エジプトを奪回したわけではない

◎ヘラクレイオス帝による「改革」？：後期ローマ帝国の基本的システムは変更されない

☆軍事システム：630年代に大きな変化はない...変更する必要性がない

☆財政・税務における変化：オリエンズ道長官の実質的権限が徐々に失われていく

●サケラリオス（財務長官 σακελλάριος）：ヘラクレイオス時代に初出

●貨幣鑄造地がコンスタンティノーブル（とシュラクサ）にほぼ限定されていく

●コンスタンティノーブル住民に対する穀物配給の停止（618年頃）

⇒主に財政部局の効率化が進展

### 《アルメニアのイシュハン》

◎アルメニア：630年代以降アルメニア方面軍が駐屯

☆ヘラクレイオス：631年頃にアルメニアに赴き、カルケドン派の受け入れを迫る

☆アルメニアの有力貴族：アルメニア各地に所領を持ち、自立性が高い

⇒637年に陰謀に加わったダウイト＝サハルニが逃亡して反乱を起し、アルメニア方面軍長官を敗死させる：ヘラクレイオス帝は彼のアルメニアでの地位を承認し、「イシュハン（君侯）」の称号とクロパラテスの位階を賦与

☆クロパラテス：皇帝一門に与えられる位階

⇒貴族からイシュハンを選任し、アルメニア地域における軍事・政治の実権を委任

### 《アラブの勢力拡大》

◎630 年代：アラブの勢力がアラビア半島を出て、ビザンツ帝国やササン朝を脅かす

☆アラブ勢力：ムハンマドやアブー＝バクルなど、ヒジャーズ地方出身者

●アラブの進出：ビザンツの防衛システムがうまく機能しない

⇒636 年のヤルムーク河畔の戦い以降、アラブの勢力がシリア北部に本格的に及んでいく：638 年までにシリア・パレスティナの大半の地域がアラブの支配下に

☆エジプト：アレクサンドリア総主教のキュロスがアラブ軍と交渉

☆キリキア・メソポタミア北部：630 年代末の段階ではなおビザンツ帝国の勢力圏

◎シリア・エジプト地域：多くの都市がほとんど抵抗しないままアラブに降伏

☆カイサレイア・マリティマやアスカロンなど、シリア沿岸部の一部都市のみが長期間の抵抗を続ける

●カイサレイア・マリティマ：6 世紀後半まで比較的経済活動が好調？

◎ビザンツ軍：シリアに展開していた東部方面軍が後退を余儀なくされる

☆アルメニア方面軍：なおアルメニアに展開

☆トラキア方面軍：バルカン半島の大半が帝国の支配圏から外れる

## 11 小アジアでの戦い

### 《コンスタンス 2 世》

◎ヘラクレイオス帝没後：帝位継承をめぐる混乱が 1 年あまり続いた後、コンスタンティノス 3 世の息子のコンスタンス 2 世（在位 641-668/9 年）が後継

☆ヴァレンティノス：旧アルメニア王家（アルサケス家）出身

☆コンスタンス 2 世：653-654 年、659-660 年にアルメニア・コーカサス地方に遠征

### 《小アジアへのアラブの侵入》

◎アラブ：シリア総督のムアーウィアらの指揮下、640 年代初頭から小アジアへの攻撃を開始

☆小アジアへの攻撃：この時期には主要な街道上の要所の攻撃が中心

◎ビザンツ軍：シリア（・エジプト）を喪失したため、軍への補給が困難になる

☆ビザンツ軍の戦術：640-650 年代にはそれ以前と大きな変化がない...アラブ軍との直接対決を避けるゲリラ戦ではなく、大規模な機動軍を展開して攻撃をおこなう

☆コンスタンス 2 世：治世を通じて、自ら大軍を率いて軍事遠征をおこなう

◎ムアーウィア：640 年代末に艦隊を創設し、海陸からビザンツ帝国を攻撃するようになる...

654 年に最初のコンスタンティノーブル攻撃作戦を実行するが失敗

☆第一次内戦（656-661 年）：ムアーウィアもビザンツ帝国と休戦協定を結ぶ（659 年頃）

◎アラブの再攻勢：ムアーウィアが混乱を收拾した後（661 年）本格化...662 年から連年小アジアへの侵入が繰り返され、越冬も常態化

☆小アジア東部：タウロス・アンチタウロス山脈が天然の要害となる

☆アルメニア：661 年にムアーウィアに服属...アルメニア方面軍も 650 年代後半にアルメニア地域からの撤退を余儀なくされる

☆ビザンツ軍：主力の一部が西方に移動しており、アラブ軍への抵抗がさらに困難に

●アルメニア方面軍長官のサボリオス（シャープール）がアラブに内通？（667/8 年頃）

⇒ウマイア朝の艦隊がマルマラ海に進出、コンスタンティノープルを長期間にわたって攻撃（670 年前後？）：ビザンツ軍の反撃に遭って失敗

☆レバノン山地帯のキリスト教徒がシリア地域を荒掠（677 年頃）

⇒ムアーウィアは再び（ビザンツ優位での）和約を余儀なくされる

### 《「テマ」の成立？》

◎680 年頃までのビザンツ軍の構成：展開している地域を別にとすると、6 世紀までと基本的な違いはない：中央、東部、アルメニア、トラキアの 4 方面軍が機動野戦軍として展開

☆属州：古代末期からの属州とその行政システムが機能し続ける

●軍隊への補給：コンメルキアリオス(κομμερκιάριος, comes commerciorum)が各属州で軍への補給の任につく？

●一般民衆からの徴税：土地税と人頭税への明確な区分が設定される？

⇒いわゆるテマ（軍の管区と行政上の管区が一致し、軍司令官が地方行政をも監督）は少なくとも 7 世紀には出現していない：古代末期の軍事・行政システムの継続

☆機動野戦軍の展開する地域の固定化：7 世紀末以降確定的となる... 8 世紀前半には地域名として人々のアイデンティティを構成するように

☆「テマ(θέμα)」という用語：資料で確認できるのは 9 世紀初頭になってから... 8 世紀前半から「ストラテギア（軍管区）」という用語が出現

●行政官区としての（旧来からの）属州：9 世紀初頭まで存続... 9 世紀前半以降、「属州総督（アンテュパトス←プロコンスル）」という職名が位階に転化していく

●軍司令官（ストラテゴス στρατηγός）の行政への監督権：9 世紀初頭から

⇒ニケフォロス 1 世（在位 802-811 年）時代の改革によって軍管区と行政官区の一体化が図られ、正式な制度としての「テマ」が生まれる

☆「兵士保有地」：9 世紀末（帝国が再攻勢に出る時期）まで資料で存在を確認できない

## 12 北アフリカをめぐる攻防

### 《グレゴリオス》

- ◎北アフリカ・カルタゴ：総督のヘラクレイオス期以来、ヘラクレイオス一門の拠点の一つ
- ⇒コンスタンス 2 世治世初期にはグレゴリオスがカルタゴ総督：646 年頃に帝位を僭称
- ◎アラブ：640 年代前半までにキレナイカ地方まで制圧...647 年にトリポリタニア以西への最初の本格的な攻勢を開始

☆グレゴリオス：カルタゴから南下、スフェトゥラ（スベイトラ）郊外で迎撃するが敗死  
⇒648 年に北アフリカの諸都市がアラブ軍に貢納を支払い、撤退させる

☆北アフリカの諸都市の対応：630 年代のシリアの諸都市とは大きく異なる

☆アラブ軍の撤退後：比較的早期にコンスタンティノーブルの権威下に戻る

### 《シチリアのコンスタンス 2 世》

- ◎コンスタンス 2 世：661 年にコンスタンティノーブルを出、662/663 年にイタリア半島に移動...ローマ教皇と会見した後（663 年 6 月）、シュラクサに宮廷を構える

☆シチリア島：コンスタンス 2 世期から、ラヴェンナにかわってビザンツ帝国の西方支配の拠点化していく...シュラクサでの貨幣鑄造も開始される（641 年～）

- ◎コンスタンス 2 世：シチリア島に東方から大軍（おそらく中央軍）とともに移動

☆シチリアで、西方領域の住民に新たな税(nauticatio)を課す

⇒シチリアに艦隊を設置して、北アフリカを後方から支援する計画？

### 《長期化する攻防》

- ◎アラブによる北アフリカ征服：8 世紀初頭までビザンツ帝国の抵抗が続く

☆最後の拠点：セプテム（セウタ）...709/710 年にアラブ軍に降伏

⇒小アジアを別にすると、非常に長期間にわたってアラブに抵抗を続けた地域

- ◎アラブの攻勢：恒常的に行われたのではなく、断続的に行われる

①647-648 年

②660 年代中盤～670 年：670 年代にビュザケナ内陸部にカイルアン市を建設

●ビュザケナへの進出：東方でのコンスタンティノーブル包囲作戦と連動

③670 年代末～680 年代前半：ウクバ・ブン・ナーフィーによる遠征...ビザンツ帝国とベルベル人の君侯カシラの連合軍に迎撃されて敗死

→アラブはカイルアンを放棄してキレナイカ地方まで撤退：688/89 年頃にはビザンツ艦隊の攻撃を受け一時バルカからも撤退

④690 年代後半：バルカ奪回後、急速に西進...695 年にカルタゴを征服



- ビザンツ帝国の反撃:697年にコンスタンティノーブルから送られた艦隊がカルタゴを奪回するが、698年にアラブが再征服

### 《長期化の要因》

- ◎北アフリカの経済力：7世紀後半以降、北アフリカ諸都市の経済力が後退
  - ☆ビュザケナやプロコンスラリスでの農業生産が停滞
  - ☆カルタゴでの建設活動：660年頃の教会以降、確認できるものがなく、都市の荒廃が進む
  - 北アフリカの有力者たちに、防衛を担えるだけの経済力が失われていく
- ◎ビザンツ艦隊の強化：コンスタンス2世によるシチリア艦隊の強化
  - ☆アラブ軍の進路：660年代以降は内陸寄りのルートが中心
  - ☆陸上において戦況を大きく変えるだけの要素とはならない
- ◎ベルベル人との関係：アラブは内陸部のベルベル人支配領域の征服もめざす
  - ☆640-650年代：トリポリタニア内陸部のベルベル人を服属させようとする
  - ☆カイルアン：ヌミディア内陸部のベルベル人地域への侵攻拠点としても機能
    - カシラ：670年代後半に一時イスラム信仰を受け入れる
    - ☆ベルベル人の抵抗：670年代以降激化
- ⇒アラブはベルベル人（内陸部）の制圧を優先し、ビザンツ帝国（沿岸部）は後回しに
- ◎ベルベル人の抵抗：740年代以降はベルベル人の大反乱が起きてウマイア朝の支配が麻痺
  - ☆9世紀：沿岸部のアグラブ朝と内陸部のルスタム朝が並列
  - ☆沿岸部：ラテン系言語を話す人々やキリスト教徒の共同体が中世後期まで存続

## 13 新しい時代へ

### 《コンスタンティノーブル第3全地公会議》

- ◎アラブとの戦い：東方では670年代後半以降、戦況が全体としてビザンツ帝国優位へ
  - ☆シリア沿岸部におけるビザンツ艦隊の活動：ウマイア朝は他地域から沿岸部の諸都市への住民の強制移住、防備の強化を進める
  - ☆ウマイア朝：クレタ島やロードス島などでの軍事行動をなおも続ける？
- ⇒帝国に、その他の問題に関して処理をおこなう余裕が生じる
- ◎コンスタンティノーブル第3全地公会議（680-681年）：カルケドン派の信仰を再確認し、ローマ教会との関係改善が図られる
  - ☆ヘラクレイオス、コンスタンス2世：単一エネルゲイア論や単意論を導入...抵抗するローマ教皇マルティヌス1世（在位649-653年）を逮捕し、クリミア半島に追放

⇒東方領域の喪失の結果、単性論派などの非カルケドン派に妥協する必要性が減少する

☆「トゥルロの公会議(Quinisextum)」(691-692年)：コンスタンティノーブル第3全地公会議の補完会議として実施される

### 《ブルガリアの成立》

◎バルカン半島：ヘラクレイオス期以降、ビザンツ軍がほとんど存在しない

☆スラヴ人：領域的な国家を（この時期は）形成しない

☆ビザンツ帝国：実効支配は沿岸部の一部の都市・要塞とその周辺などに限られる

●コンスタンス2世のスクラヴィニア遠征（658年頃）：コンスタンティノーブルからテッサロニケへの陸路での遠征が「大勝利」

◎黒海北岸：アヴァールの勢力が崩壊した後、ブルガール人が大王国を形成

☆ブルガールの集団：各地へ移動...北上した集団はボルガ・ブルガール汗国を形成

●マケドニア地方に定住した集団：8世紀前半まで独自の勢力を維持？

◎イスペリク（アスパルフ）：クヴラトの息子、一部集団を率いてドナウ川を渡河してバルカン半島に入ろうとする

☆コンスタンティノス4世（在位668/9-685年）が親征して迎撃するが敗北

⇒第一次ブルガリア王国の成立（681年）：9世紀までにスラヴ人と同化していく

### 《ローマ教皇の自立》

◎コンスタンス2世：668 or 669年にシュラクサで暗殺される...シチリアに駐屯していた中央軍長官のムゼズ=グヌニ（ミジジオス）が篡奪帝となる

☆672年頃までシチリアを統治？：コンスタンティノス4世がシチリアに親征してムゼズ=グヌニを敗死させる

☆イタリア半島：7世紀中盤～後半にランゴバルド勢力の拡大が進展...680年頃に和約がビザンツ帝国との間に結ばれることによって一時的に安定

◎ラヴェンナ総督：7世紀後半に政治的・軍事的実力を急速に喪失

☆各地の軍司令官などが自立化傾向を強める

◎ローマとその周辺も同様の経過をたどる：ローマ地域の軍司令官の上位支配者として、ローマ教皇が権力を確立していく

☆ユスティニアノス2世（在位685-695, 705-711年）：ラヴェンナ総督にローマ教皇の逮捕を命じるが、ローマ市民らの抵抗を受け失敗

⇒7世紀末にはローマ教皇を事実上の君主とする領域が姿を現しはじめる

☆この段階ではなおコンスタンティノーブルの皇帝の宗主権や徴税権などをある程度は承

認：レオン 3 世（在位 717-741 年）時代のイタリア半島での徴税強化をきっかけとしてローマの自立化がさらに加速

## 14 エリートの行方

### 《アブド・アル・マリク》

◎ウマイア朝：ムアーウィアの死後に内戦が勃発する（683-692 年）

☆680 年代末までにメソポタミア北部、キリキア地方などでビザンツ帝国が勢力を回復、バルカからも一時的にアラブを撤退させる

☆アルメニア：680 年代末に一時的にビザンツ帝国が宗主権を回復

◎アブド・アル・マリク：ビザンツ帝国との対立路線に回帰

☆セバストポリスの戦い（692 年）：小アジアにおいてビザンツ軍が大敗

→710 年頃までにキリキア、メソポタミア北部、コーカサス地域がウマイア朝の支配下に

◎行財政改革：680 年代後半からローマ的・ペルシア的な制度のイスラム化を進める

☆行政文書：ギリシア語・コプト語などによる文書から、アラビア語による文書へ

☆貨幣：691-692 年頃から徐々に変化を加えていき、696 年頃までに全く新しいディナール金貨・ディルハム銀貨が登場

●680 年代までの貨幣：古代末期のノミスマ金貨か、その流れを汲む金貨が流通

→デザインだけでなく重量までノミスマ金貨と完全に異なる体系

●ユスティニアノス 2 世：キリストのイコンの入ったノミスマ金貨を発行

⇒軍事的のみならず、経済的にもビザンツ帝国とはまったく異なる世界を形成していくことを目指す：ビザンツ帝国と経済的にも全面对決へ

### 《フィリッピコス帝》

◎ユスティニアノス 2 世：695 年に失脚...この後 717 年のレオン 3 世の即位まで混乱期間に

☆ユスティニアノス 2 世：705 年に復位し、多くの有力者たちを弾圧

◎混乱期の皇帝：比較的地位の高い人物が中心

☆レオンティオス（在位 695-698 年）：コンスタンティノス 4 世～ユスティニアノス 2 世時代に東部方面軍長官、695 年にヘラス軍長官に任じられる

☆アナスタシオス 2 世（在位 713-715 年）：プロトアセクレティスから皇帝に

◎フィリッピコス（バルダネス、在位 711-713 年）：パトリキオスのニケフォロスの息子

☆ニケフォロス：660 年代にアフリカでアラブ軍と戦った人物？／667 年頃に小アジアでアラブ軍と戦った人物？

☆570 年代にローマ帝国に逃亡してきたアルメニアの有力貴族、ヴァルダン＝マミコニアンの子孫？／フィリッピコス（マウリキオス帝の義兄弟）の子孫？

⇒ 6 世紀末までさかのぼることができる有力家門の一員？

◎伝統的な家門との関係性を示唆する行動

☆713 年にゼウクシッポス浴場でコンスタンティノーブルの「古くからの住民」と会食

☆ 8 世紀前半に編纂されたコンスタンティノーブルの都市案内(*Parastaseis Syntomoi Chronikai*)：フィリッピコス帝を「優しい／穏やかな(Φιλιππικου̅ του̅ πρ̅όου)

◎ 7 世紀前半以前から存続している家門：他にも若干の例が確認できる

☆総主教ゲルマノス（在位 715-730 年）：父でパトリキオスのユスティニアノスがコンスタンス 2 世暗殺に連座して殺される

☆ニケフォロス 1 世（在位 802-811 年）：ガッサン家の子孫？

☆コンスタンティノーブル第 3 全地公会議：ヒュパトス（コンスル）やアポ＝ヒュパトンなどの、元老院議員身分に由来する位階を持つ人が多数参加

● 7 世紀後半：パトリキオスが急速に地位を上昇させる... 8 世紀になると（バシリコス＝）プロトスパタリオスも位階化し、地位を上昇させる

●クラリッシムスやイルストリスは 7 世紀後半に急速に地位低下

●ヒュパトス、アポ＝ヒュパトン：8 世紀になると急速に地位が低下し、後者は消滅

☆コンスタンス 2 世期以降の有力者による弾圧の激化：7 世紀後半までは旧来の元老院議員家門が一定程度存続していたことを示唆

◎ 7 世紀末～8 世紀初頭：9 世紀以降も存続する有力家門が姿を現し始める時期

☆総主教フォティオス（在位 858-867, 877-886 年）の一族：700 年頃に史料に初出

◎ 7 世紀後半以降の政治システムの変化：中央政府や皇帝と密接に結びつくことに大きな意味が生じる

⇒ 7 世紀後半～8 世紀後半に、旧来からの元老院家門の一部や、新たに皇帝によって抜擢された家門などが融合して、新たなエリート層が形成されていく

☆地方でも大土地所有は（少なくともある程度は）存続：聖フィラレトスの一族など

## 15 まとめ

◎ 8 世紀前半のビザンツ帝国：小アジアとシチリア島、コンスタンティノーブル周辺、及び諸島部のみで構成される国家へ

☆国家システム：皇帝を頂点とする中央集権的色彩の強い国家

●皇帝や中央政府との関係性が、社会的地位を示す指標に

●皇帝の裁量が広範な範囲に及ぶ

☆地方における土地所有者：中央政府や皇帝との関係性が生じない限りは、政治に大きく影響しない...地方における軍務や防衛、行政などにかかわっていた可能性

●レオン 3 世：地方の同様なバックグラウンドの人々を自らの支持者として組み込もうとする？

◎ 8 世紀前半の行政・軍事機構：原則的には古代末期のものと大きく変わってはいない

☆軍事システム

☆位階システム：皇帝によって授与されるものの優位が 8 世紀の間に確立していく

☆行政機構の変化：全体として、6 世紀から 8 世紀の変化は「オリエンス道長官の任務の形骸化とその配下の部局の独立・皇帝直属化」のプロセスの進行としてとらえられる

●属州行政：総督によって軍事機構とは別に運営される

●オリエンス道長官：9 世紀後半まで存在？

●中央行政：宰相が次第に実権を失い、位階（マギストロス）へと転化

⇒ 6～8 世紀の帝国：特定の時期や皇帝によって大規模な改革・再編が行われたわけではなく、基本的には 4 世紀に確立したシステムに適宜修正を加えつつ、内外の状況変化に対応していく... 7 世紀が特に「変化の時代」だったわけではない

## 《参考書》

- ◎A. H. M. ジョーンズ（戸田聡訳）『ヨーロッパの改宗—コンスタンティヌス《大帝》の生涯—』教文館、2008年
- ◎ピーター・ブラウン（足立広明訳）『古代末期の形成』慶応義塾大学出版会、2006年
- ◎ブライアン・ウォード＝パーキンス（南雲泰輔訳）『ローマ帝国の崩壊—文明が終わるといふこと—』白水社、2014年
- ◎井上浩一『ビザンツ帝国』岩波書店、1982年
- ◎ゲオルグ・オストロゴルスキー（和田廣訳）『ビザンツ帝国史』恒文社、2001年
- ◎南川高志『新・ローマ帝国衰亡史』岩波新書、2013年
- ◎佐藤彰一『ポスト・ローマ期フランク史の研究』岩波書店、2000年
- ◎水野千依『キリストの顔—イメージ人類学序説』筑摩書房、2014年
- ◎ピエール・マラヴァル（大月康弘訳）『皇帝ユスティニアヌス』白水社、2005年
- ◎バラズリー（花田宇秋訳）『諸国征服史（I・II）』岩波書店、2012・2013年
- ◎井上浩一・根津由喜夫編『ビザンツ 交流と共生の千年帝国』昭和堂、2013年
  
- ◎P. Heather, *The Fall of the Roman Empire: The New History of Rome and the Barbarians*, Oxford: Oxford University Press, 2005.
- ◎Ch. Wickham, *Framing the Early Middle Ages: Europe and the Mediterranean, 400-800*, Oxford: Oxford University Press, 2005.
- ◎M. Jankowiak, "The first Arab siege of Constantinople", in: C. Zuckerman(ed.), *Constructing the seventh century (Travaux et Mémoires 17)*, Paris: Association des Amis du Centre d'Histoire et Civilisation de Byzance, 2013, pp. 237-320.